

20世紀イングランドにおける巡礼の復活

—— ウォルシンガムの聖母 ——

吉田正広

はじめに

本稿は、イングランド東部ノーフォーク州の北部農村地帯に位置する巡礼地ウォルシンガムを取り上げ、「ウォルシンガムの聖母 (Our Lady of Walsingham)」およびその霊廟「聖なる家 (Holy House)」の成立、破壊、復活をめぐる歴史的な展開を明らかにし、それを通じて近代イギリスにおける巡礼の特殊性を明らかにしたい。「ウォルシンガムの聖母」の霊廟は11世紀に成立し、その後修道院にその管理が任された後、中世を通じて巡礼者を集めて繁栄を謳歌したが、16世紀の宗教改革期に他の巡礼地同様破壊された。イギリスでは中世の巡礼地が近代以降になって復活した例はほとんどなく、有名なカンタベリー巡礼の聖トマス・ベケットの霊廟も現在に至るまで破壊されたままである。このようにイギリスにおいて巡礼は近代になっては消滅したのであるが、そのようなイギリス社会にあって19世紀以降に巡礼が復活した数少ない例が、ここウォルシンガム¹⁾である。

ウォルシンガムにおける巡礼の復活を考える場合に注目すべきは、一つは19世紀イギリス社会におけるローマ・カトリック教徒の位置と彼らの熱心な宗教活動であり、今一つは、イギリス国教会の中における「アングロ・カソリック」すなわち高教会派の成立と、国教会信仰の中で彼らの果たした役割である。いわゆるアングロ・カソリックは、使徒継承やキリスト教信仰の普遍性を重視し、聖像、告白および修道院の復活に象徴されるように、ローマ・カトリックへの形態的な接近を大きな特徴とする。アングロ・カソリックの中にはローマ・カトリックに改宗する者も少なからずいたのである²⁾。「ウォルシンガムの聖母」の再建をめぐる人びとの様々な関わりを解明することによって、現代イギリス社会における「巡礼 (pilgrimage)」の問題を解く鍵が得られるのではないだろうか。近代において復活した「ウォルシンガムの聖母」は、19世紀フランスのルルド (Lourdes) における聖母マリアの出現³⁾に匹敵しうるような新たな巡礼地の特徴を備えているのだろうか。

I 中世における巡礼地ウォルシンガム

まず「ウォルシンガムの聖母」の成立過程について見ておくことにしよう。一般には、「ウォルシンガムの聖母」はアングロ・サクソン時代の1061年に設立されたことになっている。例えば、1596年にピンソン (Richard Pynson) によって出版された「ピンソン・バラッド (Pynson Ballad)」によると、ウォルシンガムの貴族の寡婦リチェルディス (Richeldis) の夢の中で聖母マリアが出現し、マリアはリチェルディスをパレスティナの聖地に連れて行き、「ナザレの家 (House of Nazareth)」を見せた上で、イングランドにそれを再現するように命じたと言うのである。リチェルディスはウォルシンガムの地にマリアのお告げ通りにイエスが生まれ育った「ナザレの家」すなわち「聖なる家」のレプリカを建てたのである。イングランドの地に建設された「聖なる家」の内部には、受胎告知 (annunciation) を表す聖母子と聖ガブリエルの彫像が安置されていた。この成立の年代については異論があり、Dickinsonの詳しい研究によると、実際には

ノルマン征服以後の1130～31年に設立されたと推定されている⁴⁾。このことは、この霊廟がアングロ・サクソン時代のものとされたところに人気の秘密があったとも言えよう。

その後1153年には、「聖なる家」に隣接して、修道院 (the priory at Walsingham) が建設され、修道院にその管理が委ねられた。「ピンソン・バラッド」によれば、聖地イェルサレム巡礼に赴いたりチェルディアスの息子ジェフリー (Geoffrey) によってその修道院が建設されたことになっている。この「ウォルシングムの聖母」は十字軍の時代に聖地への関心が高まる中で注目を浴び、隣接する泉の魅力も加わって、人気を博した⁵⁾。それだけでなく、13世紀にヘンリー三世やエドワード1世など国王たちの巡礼や保護の下で発展し、14世紀にはイングランドの国民的な巡礼地となった。有名なカンタベリー巡礼よりも多くの巡礼者を集めたとも言われている。しかしその一方で、教会改革を唱えたウィクリフの支持者であるローラズ (Lollards) によって、「ウォルシングムの悪魔 (witch)」と呼ばれたり、また、霊廟やそれを管理する修道院の富の蓄積が進んで、近隣の司教から信仰の弊害を指摘されるなど、批判を浴びるのもこの時期である。

16世紀に入ると、当初ヘンリー8世の保護を得たが、やがて修道院長による不正が発覚し、その院長は交代したものの、結局は宗教改革の激動の中で、1538年に修道院組織が解体された。その霊廟は破壊され、「ウォルシングムの聖母」はロンドンに運ばれて、その他のマリア像とともにチェルシーで焼かれた。修道院の建物とその土地は一時王領地となるが、やがて売却されて、私有地となった。かつての建物の一部と隣接する形でカントリー・ハウスが建てられ、また、教会堂東端のアーチが庭園の一部として現在に残っている (図1)⁶⁾。

II 19世紀末カトリックのウォルシングム巡礼とスリッパー・チャペル

さて、近代における聖地ウォルシングムの再建を考える上で重要なのは、イギリスにおけるカトリック信仰の問題である。周知のように、1689年の名誉革命によって確立した「名誉革命体制」は、ウィリアム3世とメアリー2世の共同統治の下で、フランスに亡命したカトリックの王ジェームズ2世とその子孫をイギリスの正統な王位継承者から排除することを至上命題とした。そのような「反カトリック」の旗印の下で、それぞれ独自性を有していたイングランド、ウェールズ、スコットランドが「グレート・ブリテン」としての一体性を保ったのであった。当然このような状況の中でカトリック教徒は「反体制派」の烙印を押され、公然たる信仰の表明は不可能に近かった⁷⁾。やがて19世紀に入り1829年のカトリック教徒解放法によってようやく彼らは信仰上の自由を公的に獲得する。さらに、産業革命以降、アイルランド移民やその他カトリック信仰を持つ人口が次第に増大するとともに、イギリスにおけるカトリック信仰は大きな発展を見るのである。各地にカトリック教会や大聖堂が建設され、司教区も整備されていく⁸⁾。

さて、「ウォルシングムの聖母」の再建をめぐる動きの出発点になったのは、ウォルシングムから1マイル離れた場所にあり、宗教改革以降納屋や家畜の避難所として利用されていた、通称「スリッパー・チャペル (Slipper Chapel)」と呼ばれた教会堂であった。この教会堂は、中世においてウォルシングム巡礼が盛んであった時には、ウォルシングムへの巡礼路に一定の間隔を置いて巡礼者のための宿泊や救護施設として整備された「巡礼路教会堂 (way-side chapels)」の一つであった。この「スリッパー・チャペル」は14世紀に建設された「巡礼路教会堂」の最後の教会堂で、巡礼の最盛期には巡礼者はこの「スリッパー・チャペル」で靴を脱いで裸足で最後の聖なる1マイル (the Holy Mile) を歩いたとされている。19世紀はじめにはカトリック教徒がここを訪れて、かつての教会堂である納屋の前で礼拝した記録が残されている。こうして、イングランドのカトリック教徒にとって、かつての「ウォルシングムの聖母」を偲ぶ唯一礼拝可能な場所として「スリッパー・チャペル」は重要な場所であった。かつての「聖なる家」のあった場所は地元の有

力者の私有地で「カントリー・ハウス」が建てられ、敷地は高い壁と生け垣で囲われていたため、一般のカトリック教徒には出入りが不可能だったからである⁹⁾。

納屋となっていたかつての教会堂を再建しようとする動きは、ロンドンの裕福なある女性によって始まった。シャーロット・ボイド (Charlotte Boyd) は、ロンドンの裕福な商人の一族で、父方と母方の両方の財産を受け継ぎ、イギリス国教会の高教会派に属する慈善活動家であった。ロンドンのケンジントン、後にキルバーンで孤児院を運営していた。同時に彼女は、古い修道院を賃借して孤児たちとともに宿泊したりする活動もしていた。やがて、彼女は1892年に、ある修道院の遺跡を相続財産で購入し、それをアングリカンの「イングランド修道院復興トラスト (the English Abbeys Restoration Trust)」に寄付した。そのような彼女の活動は、古い修道院の遺跡を購入してイギリスにベネディクト派の修道院を再興して同時に孤児の面倒を看ようとする彼女の希望からであった。翌年にはその事業の延長として、彼女は自らの財産でかつての「聖なる家」のあったウォルシンガム修道院の敷地を購入する計画を立てたが、敷地の所有者側の都合で、購入に失敗している。1894年に彼女はベルギーに渡り、そこで修道院を訪れ、結果的にブリュージュでカトリックに改宗することになる。帰国後、これまでアングリカンに所属していた孤児院の施設は再び彼女の財産によって買い戻されている¹⁰⁾。

そして、1895年にはシャーロット・ボイドは今度はスリッパー・チャペルに「ウォルシンガムの聖母」の霊廟を復興しようとする計画を立てる。翌年彼女は自らの財産で、納屋となっていたスリッパー・チャペルを購入し、それを修復した。しかしながら、再建されたスリッパー・チャペルでのミサの朗読と巡礼は、カトリックのノーザンプトン司教の許可が得られなかったため、実現しなかった。制作された「ウォルシンガムの聖母」はキングズ・リンの霊廟に安置された¹¹⁾。1897年8月19日にはキングズ・リンにある「ウォルシンガムの聖母」の霊廟への最初の巡礼が行われ、翌日には、二人の神父がスリッパー・チャペルへの巡礼を行った。この1897年の第一回のウォルシンガム巡礼の様子は、地方紙に伝えられている。それによると、列車で数百人がウォルシンガムを訪れ、十字架を先頭に、ろうそくを掲げて Holy Mile を歩いた。スリッパー・チャペルでの礼拝の後、巡礼参加者は村のイン Black Lion で昼食をとり、3時台の列車で帰路についた。ウォルシンガムにはこの時点でカトリック教徒はおらず、村人は好奇心を持って観察したという記事が報じられている¹²⁾。

その後スリッパー・チャペルは放棄されたままとなった。1896年にはスリッパー・チャペルは贈与証書によってイングランド南西部にあるベネディクト派の修道院ダウンスайд・アビー (Downside Abbey) に与えられたが、後にダウンスайд・アビーはノーザンプトン司教区にそれを贈与している。カトリック教徒によるウォルシンガム巡礼が復活するのは、後述するパテンによるアングリカン・シュラインの再建と巡礼の復活がなされた1930年代以降を待たなくてはならなかった。

1933年にローレンス・ヨーエンス (Laurence Youens) がノーザンプトン司教に聖別されて、本格的なカトリックの巡礼が復活することになる。その年、新しく制作された「ウォルシンガムの聖母」が据えられ、8月15日 (聖母被昇天日) にヨーエンス司教がスリッパー・チャペルで400年ぶりのミサを祝福した。その次の日曜日の8月19日にボーン枢機卿 (Cardinal Bourne) がトマス・ウルジー枢機卿以来のウォルシンガム巡礼を果たした。12000人の人々がスリッパー・チャペルへの「国民巡礼 (National Pilgrimage)」を果たしたのである。この年、スリッパー・チャペルは、教皇の承認を得て、「イングランドのための国民聖母霊廟 (National Shrine of Our Lady for England)」と指定されたのである。

この復活した巡礼に際して、ボーン枢機卿は自動車で、一般の人々はロンドンから列車でノリッジを経由してウォルシンガムに巡礼をしている。またこの年、「ウォルシンガムの聖母ギルド (Guild of Our Lady of Walsingham)」がヨーエンスによって設立され、スリッパー・チャペルの霊廟を維持運営するための機関

が作られている。また、1935年にはウォルシingham教区の司祭が任命され、新たな教区が設けられた。1937年には大規模な「子供巡礼 (Children's Pilgrimage)」が雨の中で行われている。さらに、その年11月には、ヨーエンスの招きで、フランシスコ会の修道士がウォルシinghamに貧しい巡礼者のための療養所を開いている。こうして、1930年代にローマ・カトリックの巡礼地としての整備が始まったのである¹³⁾。その後スリッパ・チャペルは徐々に整備され、立派なステンドグラスが加えられたり、さらにはこの教会堂の周囲に「巡礼」に必要な宿泊施設や野外施設、ローソクを奉獻するための新たな教会堂などが次第に建設されていった。

Ⅲ 教区司祭パテンとアングリカン・シュラインの建設

現在のリトル・ウォルシinghamにはかつてのウォルシingham修道院と道を隔てて、新しい「アングリカン・シュライン」が隣接している (図2)。現在のウォルシinghamの中心に位置するこの国教会のシュラインと、その内部に復元された「聖なる家」および「ウォルシinghamの聖母」はどのような経緯で設立されたのだろうか。また、この新たな国教会の霊廟はカトリックの霊廟とどのような関係にあるのだろうか。

まず、このシュラインが設立された経緯から見ていくことにしよう。1921年にアルフレッド・ホープ・パテン (Alfred Hope Patten) が、ウォルシinghamの教区教会であるオール・セイントス教会 (All Saints Church) の主任司祭 (Vicar) に就任した。彼は、国教会の中の高教会派に属する聖職者で、自らの信仰を赴任したばかりの教区教会で実現しようとした。パテンは、まず、「ウォルシinghamの聖母」の像のレプリカを制作し、それを、教区教会の内部に安置したのである。これに対して、ノリッジ主教が反対し、パテンは教区教会とは別の霊廟の建設を目指すことになる。この霊廟は、「ウォルシinghamの聖母アングロ・カソリック協会 (Anglo-Catholic Society of Our Lady of Walsingham)」が私的に所有するもので、国教会とは関係のないものとなった¹⁴⁾。

新霊廟の建設の過程でアングロ・サクソン時代のもとの古い井戸が発見された。井戸の遺構とともに柱の遺構も発見され、その上に新しい「聖なる家」を建設することになった。パテンはこの土地の所有者ミルナー (William Milner) の考古学者としての専門的な見解に基づいて、この発見された井戸が中世にあった修道院の一部であったと主張し、むしろこれが本来の「聖なる家」の遺構であったと主張した。こうして新たな霊廟建設の過程で起きた「奇跡」に基づいて、自らの建設した「聖なる家」の正統性を主張したのである。¹⁵⁾ また、再現された「聖なる家」の白壁には、「パテンの石」と言われる遺物の破片が数多く埋め込まれている。その遺物には、イングランド全土の修道院の遺構から集められた遺物の破片が含まれていた。また、霊廟内部に設置された様々な祭壇には、宗教改革時に破壊された全国の修道院で使われていた石が再利用されている。これらはローマ・カトリックと対抗して、アングリカンの「聖なる家」の正統性に寄与すると同時に、宗教改革で破壊された修道院の伝統をイングランド的なものとして近代に復興しようとするアングロ・カソリック独特の考え方を示すものでもあった¹⁶⁾。

1931年には新霊廟が完成し、「ウォルシinghamの聖母」の安置してあった教区教会から新霊廟まで3千人もの人々が「巡礼」し、人々によって担がれた聖母像が新霊廟に安置されたのである。この様子は写真とともに地方紙 (Eastern Dairy Press) で報じられているが、それによれば、新霊廟の土地の所有者であったミルナーを先頭に、聖職者によって担われた「ウォルシinghamの聖母」が続き、その後を多くの人々が行列しているのが見える。これがアングリカンの巡礼の第一回とされたのである。以後、毎年「巡礼」が組織され、行列 (プロセッション) が行われることになる¹⁷⁾。

新たに建設された霊廟とそれを囲む教会堂は、パテンの信ずる「アングロ・カソリック」、高教会派の教

えに依拠した形で整備された。堂内には多くの聖像が置かれ、ロウソクを奉献するための設備が備え付けられている。告白のための部屋も設けられ、暗い堂内そのものが祈りのための独特の雰囲気醸し出している。これらはいずれも一般の国教会の教会には見られないものである¹⁸⁾。

パテンによるアングリカン霊廟の建設は様々な形でのアングロ・カソリックとローマン・カトリックの対抗関係を物語っている。建設の過程でのアングロ・サクソン時代のもとのされる井戸と柱の遺構の発見は、真の「聖なる家」の所在をめぐる論争を引き起こした。また、アングリカン・シュラインの礎石にはラテン語で、「ピウス11世が教皇で、バートラムがノリッジ司教で、ホープ・パテンがウォルシンガムの教区司祭であった時に」建設された旨の文章が刻まれていたが、バートラムは国教会の主教であり、当然、この礎石の銘に対してローマ・カトリックの側からも、国教会のノリッジ主教からも非難が投げかけられている。この碑文そのものが、パテンのアングロ・カソリックの立場を示している。「ウォルシンガムの聖母」の正統性をめぐるローマ・カトリックとの対抗とともに、国教会の主流派との立場の違いを示すものであった¹⁹⁾。それゆえに、当時のアングリカン・シュラインへの巡礼者は国教会の中のアングロ・カソリックの立場の人々であり、彼らの信仰を再確認するための巡礼であったと言えよう。

IV 現代におけるウォルシンガム巡礼——エキュメニカルな巡礼へ

最後に、現在のウォルシンガム巡礼について簡単に見ておきたい。

ローマ・カトリックの巡礼の場合には、遠距離の間は主に鉄道が使われているが、その一部には実際に旅を伴う巡礼も行われている。1897年の第一回巡礼では、交通機関も使われているが、聖なる1マイルは歩いている。1930年代にスリッパー・チャペルへの巡礼が組織化された時にも、巡礼者は鉄道や自動車を利用していたが、最後の聖なる一マイルは歩きが入っている。すべて歩いたわけではないとしても、歩くことがその一要素になっている。もう一つの特徴は、巡礼が個人で行われるのではなく、組織的に大規模に行われた点である。通常は教区ごとに巡礼が組織されている。これらの巡礼者に対する宿泊や祈りの施設として、スリッパー・チャペル周辺には多数の研修施設が設けられ、中世には修道士の祈りの場所であった回廊（クロイスター）も設けられている。また、リトル・ウォルシンガムの中心部にあった学校の建物を購入して、宿泊施設として利用している。

アングリカンの巡礼は、実際の歩きでの旅を伴うことはまったくなく、むしろ自己の人生のあり方を考える宗教教育として位置づけられているように思われる。狭い意味で「巡礼 (pilgrimage)」と呼ばれているものは、ウォルシンガムの中で「ウォルシンガムの聖母」を担いで村の中を練り歩く行列（プロセッション）のことを指す。また、全国のアングリカンの教区ごとの「巡礼」や、夏休みを利用した児童の合宿研修が、「巡礼」と呼ばれ、いずれも貸し切りバスなどでウォルシンガムに来てアングリカン・シュラインに隣接する研修施設での宿泊と研修活動全体を指す。児童を対象とした「子供巡礼」は、学校での宗教教育の補完的役割としての体験学習とも考えられる²⁰⁾。

さて、地元教区とそれぞれの霊廟との関係について見ておこう。アングリカンの場合には、霊廟建設の経緯そのものが示すとおり、教区教会と霊廟の運営は別個に行われている。霊廟の維持管理のための組織が置かれ、様々な形での寄付を集める努力がなされている。ローマ・カトリックの場合にはむしろ教区教会の方が、質素である。リトル・ウォルシンガムの中心に、教区教会として「受胎告知聖母カトリック教会 (the Catholic Church of Our Lady of the Annunciation)」が置かれているが、仮の作りであり、立派な教会への建て替えのための寄付の募集が行われている。そのパンフレットによれば、現在100名ほどの教区民がいるが、それだけでは立て替えの資金がまかなえないため、寄付を募集しているとの記述がある。

ところでこのウォルシンガムには様々な宗派が進出している。古くは、メソヂスト教会が1794年に建設されているし²¹⁾、1967年にはかつての鉄道の駅舎を利用してロシア正教会が建設されている。こうして、ウォルシンガムというノーフォーク州の田園地帯にある小さな村には多様な宗派の教会と多様な巡礼の施設が整備され、多くの巡礼者と観光客を集めている。さらに、ローマ・カトリックとイギリス国教会の間で、次第に教派を越えたエキュメニカルな巡礼が組織されつつある。1980年には、カンタベリー大主教がスリッパー・チャペルを訪問し、1982年には、カトリックの「ウォルシンガムの聖母」がロンドンのウェンブリー・スタジアムでヨハネ・パウロ2世の祝福を受け、その年、アングリカン・シュラインを訪問している。さらに、1983年には、ロシア正教の「ウォルシンガムの聖母のイコン」の奉獻と行列が行われている²²⁾。1996年にはノリッジ大主教がスリッパー・チャペルで礼拝を行った。2001年には、毎年9月24日が「ウォルシンガムの聖母の祭日」と定められ、カトリックとアングリカンの共同礼拝が挙行された。こうして、ウォルシンガムは、様々な教派が進出し、エキュメニカルな宗教教育の実践の場となっている。

おわりに

近代における「ウォルシンガムの聖母」の復活は、イギリスにおけるカトリック教徒の存在と、国教会の中のアングロ・カソリックと呼ばれる高教会の独自の信仰のあり方によってもたらされたものであった。巡礼の概念に幅はあるが、何れも、巡礼を信仰の重要な要素と位置づけていたと言えよう。現在のウォルシンガムを訪れてみると、観光地化しているが、カトリックもアングリカンも、それぞれの霊廟の周囲に合宿研修のための施設を整備し、イングランド中の教区や学校から「巡礼」を受け入れ、「子供巡礼」や8月に毎年行われる巡礼など様々な企画を行っている。こういった意味で現在のウォルシンガムはカトリックにとってもアングリカンにとっても宗教教育の場として位置づけられているように見える。アングリカンの2泊3日の「子供巡礼」では、ウォルシンガムの中でのスタンプラリーのような形で、様々な宗派の教会や施設をめぐるプログラムが用意されている。公立学校における宗教教育が現在でも行われているイギリスにおいて、ウォルシンガムは教派を越えた「エキュメニカルな」キリスト教教育に貴重な場を提供していると言えよう。その意味では、ルルドのように病気の治癒という奇跡を求めての巡礼地とはかなり異なった、現代イギリス独自の巡礼の形態を示しているのではないだろうか。

注

- 1) ウォルシンガムは、リトル・ウォルシンガムとグレイト・ウォルシンガムがあるが、前者に霊廟や教会が集中している。ここではウォルシンガムという時には主に前者のリトル・ウォルシンガムを指す。ウォルシンガムの村落内の様々な施設についての概要は、ガイドブックである *Walk Around and Discovery Walsingham, Walsingham, 1992* が便利である。ウォルシンガムの聖母の公式のホームページは www.walsingham.org.uk で、概要を知るには便利である。
- 2) アングロ・カソリックについては、さしあたり、J・R・H・ムアマン（八代崇他訳『イギリス教会史』聖公会出版、1991年、534～538頁を参照。イギリス国教会全般については、村岡健次『近代イギリスの社会と文化』ミネルヴァ書房、2002年、特に第10章「イギリス国教会——過去と現在」を参照。
- 3) フランス西部の巡礼地ルルドについては、関一敏『聖母の出現——近代フォーク・カトリズム考』日本エディタースクール出版部、2004年（オンデマンド版）を参照。
- 4) J. C. Dickinson, *The Shrine of Our Lady of Walsingham*, Cambridge, 1956, pp. 4-9.
- 5) *Ibid.*, pp. 9-23.

- 6) *Ibid.*, pp. 42-68.
- 7) 名誉革命以後におけるイギリスの反カトリック感情がイギリス・ナショナリズム (British Nationalism) に寄与したことは、Linda Colley, *Britons: Forging the Nation 1707-1837*, New Haven, 1992, pp. 11-54 (川北稔監訳『イギリス国民の誕生』名古屋大学出版会、2000年、11～58頁) を参照。
- 8) 浜林正夫『イギリス宗教史』大月書店、1989年、209～213頁。
- 9) Peter Rollings, *Walsingham England's Nazareth: An Account of England's National Shrine of Our Lady at Walsingham*, Fakenham, 1998, pp. 17-18.
- 10) Kate Moore, *Walsingham: Charlotte Boyd 1837-1906*, Walsingham, 1998, pp. 15-22.
- 11) *Ibid.*, 22-27.
- 12) *The Eastern Daily Press*, 21st August 1897, cited in Rollings, *op. cit.*, p. 51.
- 13) *Ibid.*, pp. 52-56.
- 14) Simon Coleman and John Elsner, "Pilgrimage to Walsingham and the Re-Invention the Middle Ages", J. Stopford, *Pilgrimage Explored*, York, 1999, pp. 194-195. また、アングリカン・シュラインの概要については、公式のパフレットである *The Shrine of Our Lady of Walsingham*, Walsingham, 2002が便利である。
- 15) Coleman and Elsner, *op. cit.*, pp. 200-202.
- 16) *Ibid.*, pp. 204-208.
- 17) "Opening of New Shrine of Our Lady of Walsingham", *The Eastern Daily Press*, 16th October 1931.
- 18) Coleman and Elsner, *op. cit.*, pp. 208.
- 19) *Ibid.*, p. 206.
- 20) Simon Coleman and John Elsner, "Performing Pilgrimage: Walsingham and the ritual construction of irony", Felicia Hughes-Freeland, *Ritual, Performance, Media*, London, 1998, pp. 46-65.
- 21) メソヂスト教会については、John Hawkes, *Walsingham: Methodism in the 19th Century*, Fakenham, 1998を参照。

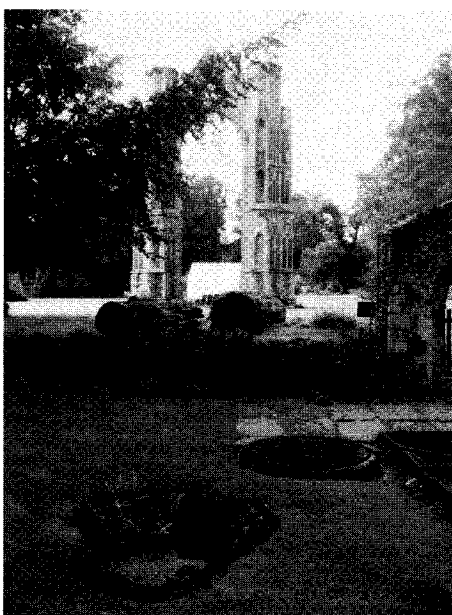


図1 「聖なる家」を管理していたかつての修道院の遺構と井戸



図2 現在のアングリカン・シュラインの外観